

ハチドリの一滴

2023.1.10

「ハチドリの一滴（ひとしずく）」という南米のアンデス地方に伝わる民話がある。以下が、その内容である。

森が燃えていました。森の生きものたちは、われ先にと逃げていきました。でも、クリキンディという名のハチドリだけは、いったりきたり、口ばしで水のしずくを一滴ずつ運んでは火の上に落としていきます。動物たちがそれを見て「そんなことをしていったい何になるんだ」といって笑います。クリキンディは、こう答えました。「私は、私にできることをしているだけ」

今、私たちのまわりには、経済、環境、エネルギー、そして教育など、様々な問題がある。例えば、原発の再稼働とエネルギーの問題、インフレや円安の問題、日本の領土問題、新型コロナウイルス感染症への対応などである。それぞれの問題に対し、政治家や官僚などが、様々な角度から考え、話し合い、対策を練り、実行してくれている。

一般の人たちは、それに対して、怒ったり、落胆したり、あきらめたり、ときには喜んだりしている。多くの人たちは、自分の意見や考えがあったとしても、どうすることもできないと、傍観者となりあきらめているかもしれない。

だが、個人個人の一滴（ひとしずく）は、本当に小さなものでも、その一滴が集まれば、川となり流れ始め、されがさらに集まれば海となる。そうなれば、一般の人たちの意見や考えが世の中を動かすかもしれない。このことは、歴史が証明している。

教育の仕事も、言うなれば、「ハチドリの一滴」ではないだろうか。一人の教員として、目の前の人間に伝えなければならないことがある。それを伝えるために、自分にできることを、ただひたすらに、ただ愚直にやっているだけなのではないか。小さな小さな力かもしれないが、せめて自分が関わる子どもたちだけでもという思いである。

今までの教員人生を振り返ると、「何もそこまでしなくとも」とか、「何のためにやっているんだ」と、自分で疑問に思うこともあった。それらは、今思うと、「ハチドリの一滴」だったのではないか。自分にできることをしているだけなのである。誰かにやるように言われたわけではない。途中でやめても誰にも何も言われぬ。そういったことである。

やらなくてもいいこと、やらなくても済むことを、あえて続けることに意義がある。それが、少しずつ大きな力を発揮するようになる。そう思う。今年も「ハチドリの一滴」である。他の人がやりそうにもないこと、自分にしかできないことをやっといこうと思う。